



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

2018（平成30）年度 学会巡検報告：
"マイノリティ"な大久保・新宿を歩く（学会記事）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 糟谷,武志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159236

2018（平成30）年度 学会巡検報告

“マイノリティ”な大久保・新宿を歩く

実施日：2019年3月17日（日）

案内者：荒井正剛（学部26期・院37期，本学教員（社会科教育学））・須崎誠二（学64期・院50期）

コース：JR大久保駅—東京媽祖廟—新宿区大久保（JR新大久保駅周辺）—新宿ゴールデン街—新宿二丁目

2018年度の学会巡検は、2019年3月17日（日）「新宿にみる都市空間の多様性と多元的社会」をテーマに行われた。今回は、荒井正剛氏ならびに須崎誠二氏に、各巡検ポイントにおいて説明を行っていただいた。年々増加し続ける外国人居住者が多く居住する新宿区大久保周辺、そして近年可視化が進むLGBT（女性同性愛者、男性同性愛者、両性愛者、トランスジェンダーの頭文字を取った性的マイノリティの総称の一つ）コミュニティの中心として機能する新宿区新宿二丁目周辺を訪れる巡検であった。

はじめに、JR中央線・総武線各駅停車の大久保駅南口において、巡検参加者の紹介、および新宿区の外国人居住の現状および性別による出身国の違いについての説明があったのち、大久保駅南口近くにある東京媽祖廟を訪問した。こちらは台湾の廟であり、2階は関帝廟、3階は媽祖廟、そして4階は仏教の廟となっている。この東京媽祖廟は、2012年に寄付によって購入されたビル内部にある。設立記念日には200-300人ほどが集まり、また、旧暦1日には30人ほどが集まるそうだ。近辺のビルのあるフロアには、イスラームの礼拝所があるとのことだが、景観には表れて

おらず、荒井氏のご説明なしには気づくことが出来なかった。

東京媽祖廟を後にし、大久保駅と新大久保駅間の百人町一丁目を大久保通りに向けて歩いた。この地区は、タイ語・ネパール語・クメール語・韓国語・中国語など多言語な看板と共に、アジア系のレストランが軒を連ね、また、多言語が記された食料品店、「外国人歓迎」と書かれた不動産屋などが存在する。百人町・大久保地区は住民の約25%が外国人とされている。周辺には日本語学校が多く立地しており、これが外国人居住の大きな理由となっていると考えられる。

大久保通りの北側の路地に入ると、南側と比べてレストランよりも食料品店や生活用品店が多くみられ、生活感のある街並みとなっていた。



写真1 大久保の多言語で表された看板
(筆者撮影)

大久保通りに戻り、新大久保駅の東側へと進む。この辺りは大久保通りに対し細い路地が並んでいる。これは新田集落の名残であり、地域の再開発を妨げる一因となっていた。そのため安価な賃料で入居できるアパートなどが多かったこと、そして2010年代まであった韓国系菓子メーカーの工場の存在が、この地域をコリアンタウンとして拡大させた一因とされている。山手線の高架下をくぐると、一気に十代・二十代の女性が格段に増える。2019年現在、日韓の国家関係が冷え込むなか、日本の若年層、特に女性の間で第三次韓流ブームが存在し、食・美容・韓流アイドルの三つが特にブームをけん引している。日本におけるコリアンタウンの中心地である大久保地区、特に大久保通りは、2017年後半から流行しているチーズタッカルビという韓国料理の看板に出した韓国料理店、韓流コスメ用品のお店、そして韓流アイドルの曲を流したアイドルグッズ店の多さが目を引く。ブームには必ず盛衰があるが、筆者が大久保地区に頻繁に足を運ぶようになった2017年以降は、常に若年層の女性により賑わっている印象だ。

大久保通りから職安通りに向かう路地の中で“イケメン通り”と呼ばれる路地がある。この路地に入ると、チーズハッドグと呼ばれるこれまた2019年に非常に流行している韓国料理を売る小さな露店や、韓流コスメの小規模店の店が多く立ち並ぶ。大久保通りほどの人通りではないものの、チーズハッドグの露店に並ぶ若者などで賑わっていた。

その後職安通りを横断すると、歌舞伎町に入る。歌舞伎町に入るとこれまで見られたコリアンタウンや外国人居住地区の様相から、夜の街を感じ

させる景観へと変貌を遂げる。ビールフェアなどのイベントが開催されることもある大久保公園には、治安維持のためだろうか、高い柵が設置されている。歌舞伎町は言わずと知れた夜の街であり、夕方から明け方は活気にあふれているが、午前中は人通りも多くなく、この時間帯が歌舞伎町にとっての眠る時間帯なのであろう。



写真 2 大久保公園での荒井氏による案内

(筆者撮影)

その後我々は、歌舞伎町の東端にある新宿ゴールデン街に足を運んだ。ここからは須崎誠二氏のご説明により巡検が進んだ。新宿ゴールデン街は近年外国人観光客に人気のスポットとなっている小さな居酒屋・バーが立ち並ぶ区画であるが、元々は内藤新宿の性接待系の旅籠屋であり、その後新宿遊郭となった。その中でもゴールデン街は青線地区、すなわち非合法の売春地区であったようだ。

その後我々は靖国通りを東進し、靖国通りと甲州街道、そして都道 305 号線に挟まれた地区である新宿二丁目に向かった。新宿二丁目は、日本最大のゲイ・タウンとしても知られており、週末の深夜には人が溢れかえる地区である。そこに学芸地理の巡検の集団が飛び込むのはいかがなものか…とも思ったが、日中の新宿二丁目はあまり LGBT コミュニティの景観が大きく出ているわ

けではなく、「ここが本当にそうなのか？」といった参加者の声も聞かれた。しかし景観を詳細にみると、LGBT コミュニティにおいて使用される、多様性の象徴であるレインボーフラッグが掲げられているお店や、「会員制」と札が掲げられているバー、筋肉質の男性が描かれたポスターを掲げる本屋など、日中の新宿二丁目でもゲイ・タウンとしての様相を垣間見ることができた。

案内者の須崎氏によれば、新宿二丁目のコンビニエンスストアには氷が多く売られているらしい。それは、この地域のゲイバーでは飲み物が提供され、氷が欠かせないからだそうだ。コンビニエンスストアにおける商品の違いも、その地域の特徴を表す重要な景観なのであろう。一行は最後に、新宿二丁目の中心部にある新宿公園で解散し

た。

本巡検は、我々がよく知る新宿周辺において、日本社会の中でマイノリティである在日外国人、そしてLGBTの人々が集う地域を、案内者の荒井氏および須崎氏による解説により、より詳細に目を向け理解することが出来た。僭越ながら、この場を借りて、今回の巡検を案内していただいた、荒井氏、そして須崎氏に感謝の意を表したい。

(院 51 期 糟谷 武志)